韓国韓医学の潮流

金（きむ） 璋顯（じゃんひょん）（大韓韓醫學會会長）

現在の韓国医療は、古代から韓國人の健康を担当してきた韓医学と、開港以後に西洋と日本により導入された後、現在隆盛となっている西洋医学の両医学により構成された二元的医療体系である。韓医学は開港以後数回に渡り存廃の危機に直面した時もあったが、不屈な生命力、国民の愛好心、そして多くの先駆者達の努力などにより、このような難局を克服し、現在韓医学の全盛期を謳歌するようになった。

韓医学の歴史は古朝鮮時代にまで遡る。古朝鮮は韓国人の手により打ち立てられた最初の古代国家である。B. C. 2333年の記録である“檀君神話”を通じて知ることができる。この国家では、初期には疾病をシャーマン（Shaman）である巫医達が治療したとされており、また薬物と禁忌に対する医学的概念も存在していたとされる。特にこの神話に記されているヨモギ（艾）とニンニク（蒜）は中国秦漢時代の『神農本草経』には記載されておらず、魏晋時代の『名医別録』から記載されており、このことは韓國において中国とは異なる独自の伝統医学が存在していたことを示している。

高句麗、百済、新羅の三国が鼎立し覇権を争った紀元前１世紀頃から紀元後７世紀までの三国時代の医学がどのようなものであったかは具体的な資料が少ないため、簡単に断定することは困難である。しかし、日本や中国との医学交流が広範囲に行われていた点をまず述べる必要がある。この時期に中国で刊行された本草書籍には、人参、金屑、細辛、五味子、款冬花、昆布などは韓国産が優れていると記されている。そして『日本書紀』欽明主22年の記録では、高句麗の平原王３年（561年）に、中国江南の呉国人知聰が内外典、薬書、明堂図など164巻を持参して高句麗を経由し日本に帰化したとする記録が存在する。『日本書紀』には高句麗の侍医、百済の医博士、採薬師、呪術師などの官職を備えた医師達が日本を訪問したとする記録が認められる。また日本の医書『医心方』に記されている百済と新羅に関する医学の記録を通じて、この時期の医学内容の一部が理解できる。

668年に新羅が他の国を順次滅ぼし韓半島に勢力を拡げ、また北部地方は高句麗の昔の領土に渤海が興り、南北時代が形成される。この時期には韓國最初の医学教育機関である“医学”が設立され、体系的に医師を養成するようになり、日本、中國、印度、ペルシアなどの隣国と医学交流が活発になった。

高麗時代（918－1391）はこれまでに体系化された医療制度と医学の発展を土台にして自主的な発展が進んだ時期である。特に医師選抜のための科挙制度が実施されたことは、能力のある医師を養成することが可能となり、医学の発展に大きな影響を及ぼした。この時期に台頭した“郷薬”論は、韓国産薬材を用いて韓国人の疾病を治療することを主とした理念である。『郷薬救急方』、『三和子郷薬方』、『郷薬古方』、『郷薬簡易方』など当時出版された医書に付けられた“郷薬”という名稱から理解できる。

朝鮮時代（1392－1875の開港期まで）は日本との７年戦争が終わった年（1598年、この戦争を韓国では壬辰倭乱、日本では文禄慶長の役と呼ぶ）までを前期とし、その後1876年（開港時期）までを後期に分ける。

朝鮮前期は自主的な郷薬政策、中国からの医学輸入及び書籍刊行、『医方類聚』の編纂及び刊行、ハングル版医書の刊行などを特徴とする。特に、世宗は郷薬を奨励するために『世宗地理志』を作成

EDUCATION
Feb. 1980：Graduate from Kyunghee University. (Dept. of Korean Oriental Medicine)
Aug. 1982：Master's degree in Korean Oriental Medicine, Graduate School of Kyunghee University.
Aug. 1988：Ph.D. in Korean Oriental Medicine, Graduate School of Kyunghee University.
CAREER
Apr. 1994-Mar. 2002：President, the Association of Korean Oriental Pediatrics.
June. 1998-Feb. 2003：Director, Dongguk University Boondang Oriental Hospital
Apr. 1999-Mar. 2002：Chairman, Central Training Committee of the Korean Oriental Medicine Hospital Association
Apr. 2000-Mar. 2002：Director for Scientific Affairs of the Korean Oriental Medicine Hospital Association
Apr. 2003-Apr. 2005：Committeeman, Health Technology Evaluation Board of the Korea Health Industry Development Institute
Apr. 2004-Mar. 2006：Vice President, the Korean Oriental Medical Society
CURRENT POSITION
1993. present Professor, Department of Korean Oriental Medicine of Dongguk University
Apr. 2006_present President, the Korean Oriental Medical Society
Apr. 2006_present Vice President, the Association of Korean Oriental Medicine
Mar. 2007_present Dean, Department of Korean Oriental Medicine of the Dongguk University.
Mar. 2007 present Director, Dongguk University Gyeongju Oriental Hospital
MEMBERSHIP
-The Association of Korean Oriental Pediatrics.
-The Oriental Medical Information Society
-The Korean Society of Oriental Internal Medicine
-The Korean Acupuncture and Moxibustion Society
-Health Policy Development Research Institute of Graduate School of Public

し、郷薬の分布実態を調査させ、『郷薬取月令』、『郷薬集成方』などを刊行し、韓国医学の独自的な発展を試みた。また、当時東アジアに存在する医学書籍などを整理した『医方類聚』』（1445年１次完成）を編纂した。『医方類聚』は現存する医書に限らず失われた多くの医書が含まれている点において、学術史的価値が大きい著作と言える。特に、『医方類聚』は壬辰倭乱の時に日本の将軍加藤清正が1592年に漢陽（ソウル）から持ち出し、日本の多紀家に保存されていたものを近世に喜多村直寛が復刊し、聚珍版を作成した歴史的医書である。

朝鮮前期までに蓄積された学術的成果は『東医宝鑑』により結実された。『東医宝鑑』は許浚が14年間の努力の末、1610年に作成した総合医書である。内経、外形、雑病、湯液、鍼灸など五篇に構成されているこの医書は20数回に及び、中国や日本などで刊行されるほど好評であった。現在の韓医学もこの医書に基づいている点で意義深い。『東医宝鑑』が刊行された以降、韓国の医学は飛躍的な発展を遂げた。多くの『東医宝鑑』の亜流書籍などが出版された。本草学と鍼灸学、そして小児科、婦人科などに関連した書籍が数多く出版され、さらに伝染病への対応を主とした論議の契機にもなった。このような発展は韓医学が民衆に深く根付く力となった。

1876年日本と丙子修護條約が締結され、外国との開港が実施された以後、西洋医学の流入により韓国では二元的医療体系が成立することになった。以後西洋医学が医療の中心になると、韓医学は徐々に周辺部に押し出され、沈滞の期間が始まった。1899年韓医学教育が管制により廃棄され、ついに1907年韓方診療までも官制により廃棄された。特に1913年医生規則が公布されると、韓医師は医師よりも身分の低い医生に含まれるようになった。しかし、韓医界はこの時期西洋医学中心の医療政策に対応して、韓医学教育機関の設立、韓医団体の設立、振興大会の開催、学術誌の発刊などで学術を存続させた。

1945年植民地解放（終戦）後、民族医学を復興させようと韓医師達の努力は継続した。解放された年に朝鮮医士会と呼ばれる韓医師団体が創立され、東洋医学会の創立（1947年）、韓医学教育機関である東洋大学館の設立（1947年）など、韓医学復興のための基礎作業が行われた。このような努力は韓医師制度樹立のための努力に繋がっていった。多くの韓医師達が国会議員と活発に交渉を行い、韓医師制度導入の必要性を説得した。1951年に困難な局面を打開し、国会で韓医師制度導入に関する案件を通過させ、韓医師制度が誕生することになった。韓医師制度の導入により、韓医学は発展に発展を繰り返した。大韓韓医師協会の創立（1952年）、東洋医学誌の発刊（1954年）、東洋医学館のソウル韓医科大學としての昇格と東洋医学大学としての発展（1953年）などにより、学術発展の気運が高まった。

大韓韓医学会は1955年12月４日に創立総会を開催した。1963年５月１日に大韓韓医学会報創刊号が発刊され、その年から学会が主管する全国学術講習会が開催され、1966年には古典整理事業の一環として『東医宝鑑』翻訳事業と韓医学用語制定事業が実施された。1974年から定例的に全国韓医学学術大会が実施され、学術発表が継続されている。1973年には第３回国際鍼灸学術大会を韓国で開催し、国際学会の注目を浴びた。

現在韓国には11校の韓医科大学と１校の韓医学専門大学院により、約3500名の学生が教育を受けている、韓医科大学を卒業し韓医師として活動している人数が約18,000名に達する。韓医学の研究はこれら12校の韓医科大学と韓医学専門大学院を中心に実施されている。

Health of Seoul National University
Main Monographs
1. Effect of Xingyo-tang on Learning and Memory Performanced in Mice. Korean Journal of Oriental Physiology and Pathology. 2005;19(1):139-145.
2. Anti-thrombic activity of Korean herbal medicine, Dae-Jo-Whan and it's herb. Vascular. Elsevier, 43(4)283-288. (USA. SCI2005. 10. 01)
3. Purification and characterization of a new anticoagulant protein pp27, from placenta.Thrombosis Research, PERGMON-Elsevier116(5)421-429. (UK SCI2005. 03. 29)
4. Effects of Methanol Extract of Uncariae Ramulus et Uncus on Ibotenic Acid-Induced Amnesia in the Rat. Journal of Pharmacological Sciences, The Japanes Pharmacological Soiety 2004;96(3):314-323.
5. Effect of Saenggitang on Learning and Memory Ability in Mice. Korean Journal of Oriental Medicine. The Korean Oriental Society. 2004;25(4):51-60.
6. Anti-arthritic Properties of ShinEumHur-Herbal Acupuncture Assessed by Knee Circumference, Squeak Threshold and Weight Distribution Ratio in Rats. Korean Journal of Oriental Physiology and Pathology2004;18(4):1001-1006.
7. Protective Effects Wonjiseokchangpo-san has on Brain Damage and Cognitive Dysfunction in Transient Focal Cerebral Ischemia. Korean Journal of Oriental Physiology and Pathology, 2004;18(6):1777-1783.
8. Combined treatment with colchicine and Herba Taraxaci (Tarazacum mongolicum Hand.-Mazz.) attenuates Behcet's disease-like symptoms in mice and influences the expressions of cytokines. International Immunopharmacology Volume3. Issue5. May2003. Pages713-721
9. Combined Treatment of Colchicine and Herbal Medicines (Gamichunghyulbohyul-tang) or Gamiyongdamsagan-tang) Attenuate the Behcet's Disease Symptoms in Mice. Korean Journal of Oriental Medicine. The Korean Oriental Society2001;22(2):102-108.
10. Outcome criteria in nocturnal enuresis treatment, J Korean Oriental Pediatrics2006;20(3):61-74

漢方医学の潮流

石野（いしの）　尚吾（しょうご）（昭和大学医学部第一生理学）

現在、日本で医学、医療の主流は西洋医学である。しかし、最近、漢方医学は次第に医療の中で大きな位置を占めつつある。漢方医学とは日本における中国の伝統医学のことである。

日本への古代中国医学の導入は6世紀ごろまでは主に朝鮮半島経由で行われていた。7世紀以降は中国との正式交流により、医学文化等は直接大規模に取り入れられるようになった。平安時代になると、わが国の文化意識が萌芽し、医学書が編纂されるようになり、西暦984年には日本の風土、日本人の思考が反映されている内容の日本最古の医書、『医心方』が完成した。

時代と共に臨床医学としての蓄積がなされた医学書が編纂され、特に16～17世紀には漢方は隆盛を極めた。16世紀には、中国の金・元医学が伝えられた。陰陽五行説の影響の強い医学であるが、田代三喜、曲直瀬道三らが日本的な医学に改めた。これをその後興った古方派に対して、後世派と呼んでいる。

17世紀後半、『傷寒論』を最大評価し、そこに医学の理想を求めようとする流派、実証的医学を旨とする古方派が登場した。この派は陰陽五行説に否定的な立場に立ち、漢方病理として日本独特の気血水説を立てた。この時点で日本的な「証」の概念、主義が形成されたと言ってよいであろう。古方派が極端な主義に陥った反省もあって、処方の有用性を第一義として、臨床に役立つものなら流派を問わず良いところを活用するという柔軟な考えを持つ流派が現れた。こういった立場の人を折衷派と呼んでいる。

16世紀後半より、西欧諸国の医学が日本に伝えられ、18世紀以降はますます盛んとなった。オランダ医学が主流であったので、蘭方と呼び、これに対して中国より伝来の医学を漢方と称した。蘭方との折衷を図った漢蘭折衷という派もある。

19世紀後半より漢方は次第に衰退し、西洋医学が主流となった。ことに1883（明治16）年に医師国家試験の内容が西洋医学となり、1895年、国会第八議会において漢方医学存続願は否決された。これにより決定的に西洋医学が医学の中心となった。

以来、国は医師に学ばせる教科から漢方を最近まで抹殺し続けた。医師免許証を取得した者が漢方の知識、技術を身につけ地道な努力によって引き継がれていくことにより、民間レベルで細々と生き続けてきた。現在、この結果として西洋医学を修めた医師が診療に漢方薬を用いることができる世界でも希有な国となり、21世紀に入りWHO（世界保険機構）や多くの国からパラダイムの異なる二つの医学の総合モデルとして注目を集めているのは歴史の逆説とも言うべきである。

1950年「漢方をきちんとした学問にして盛んにするためには、どうしても学会をつくらなければならない」の思いから、全国から98名の志のある人々が集まって日本東洋医学会を設立し、1977年に社団法人として認可された。

1967年にはじめて漢方エキス剤が薬価基準に収載され、1976年には多数の医療用漢方製剤が追加されて健康保険医療に導入された。今日では約70％の医師が診療に漢方を用いている。まさに、日本のみの特徴であるが、医師の免許で西洋医学も漢方も自由に用いられるようになった。このことは前述したように医学教育の中に漢方医学がなされないままで漢方薬を使用することも可能となったのである。

1991年には西洋医学の学術団体である日本医学会の分科会としての加盟が認められ、2001年には医学、薬学教育のコアカリキュラムに漢方が医学教育に組み入れられた。2005年には広告可能な漢方専門医が厚生労働省より認められた。

日本に輸入された中国医学は漢方となり、時代、時代の影響を受けつつも本質を伝えながら日本化され、今日、西洋医学教育の中に取り入れられるに至ったが、今後は日本のみならず、世界の中で、医学、医療の一つの柱となることを期待したい。

略歴

1966年3月	昭和大学医学部卒
1966年～1997年	インターン
1967年～1979年	日本医科大学産婦人科教室在局
1976年～1977年	同上医局長
1979年～1984年	昭和大学第3内科在局
1986年～2008年	北里研究所東洋医学総合研究所診療部門長
1987年～2003年	学校法人・東洋鍼灸専門学校校長
2000年～	昭和大学医学部第一生理学客員教授 現在に至る